

旅日記表紙 (左より鹿島三社参宮、西国巡礼旅日記、善光寺道中日記)

実施者

- ＜教員＞千葉工業大学 創造工学部 建築学科 藤木研究室 藤木 竜也 准教授
- ＜参加者＞千葉工業大学 創造工学部 建築学科 石井 日陽
- ＜協働パートナー＞【市民団体等】南房総市大井区 【個人】芳賀区長

1. 背景・目的

南房総市大井区には、江戸時代に当地(大井村)で名主を務めた遠藤家・保里家の古文書群(保里家文書)が伝わる。これは、かつての大井集落ならびにその周囲に広がっていた嶺岡牧の様相をうかがい知ることを可能とする貴重な記録である。

本プロジェクトは持続可能な集落創造のもと、保里家文書に含まれる古文書・古地図をひも解き、大井集落の足跡を物語る歴史を見出し、地域住民への公開機会を通じて郷土への眼差しを共有することで歴史・文化の視点から集落づくりに資することを目的として、次の3点から取り組むものである。

1. 集落が受け継いできた古地図・古文書等の歴史資料を整理し、次世代に引き継ぐ。
2. 歴史資料を解説し、近世・近代の大井集落の次世代に引き継ぐべき歴史をひも解く。
3. 研究成果を広く情報公開することにより、集落の資産としての古文書・古地図の情報及びそれらから見た地域の歴史的価値を住民の方々と共有し、また、その理解を深めるために研究成果の一般公開を行う。

2. 活動内容

2021年度より磯野研究室(都市環境工学科)で継続している古地図を用いた大井区の景観に関する研究に加えて、2022年度では、藤木研究室(建築学科)でも古文書を解説して大井区の歴史をひも解く調査研究の取り組みに着手した。

保存方法の検討に合わせて行った古文書群の概要把握(2021年度)を基に2022年度では、『鹿島三社参宮』(1829年/文政12年)ならびに実施者(藤木)が便宜上次のように名付けた『西国巡礼旅日記』(1863年/文久3年)、『善光寺道中日記』(1907年/明治40年)の3つの旅日記(道中記)を対象にした。これらの翻刻

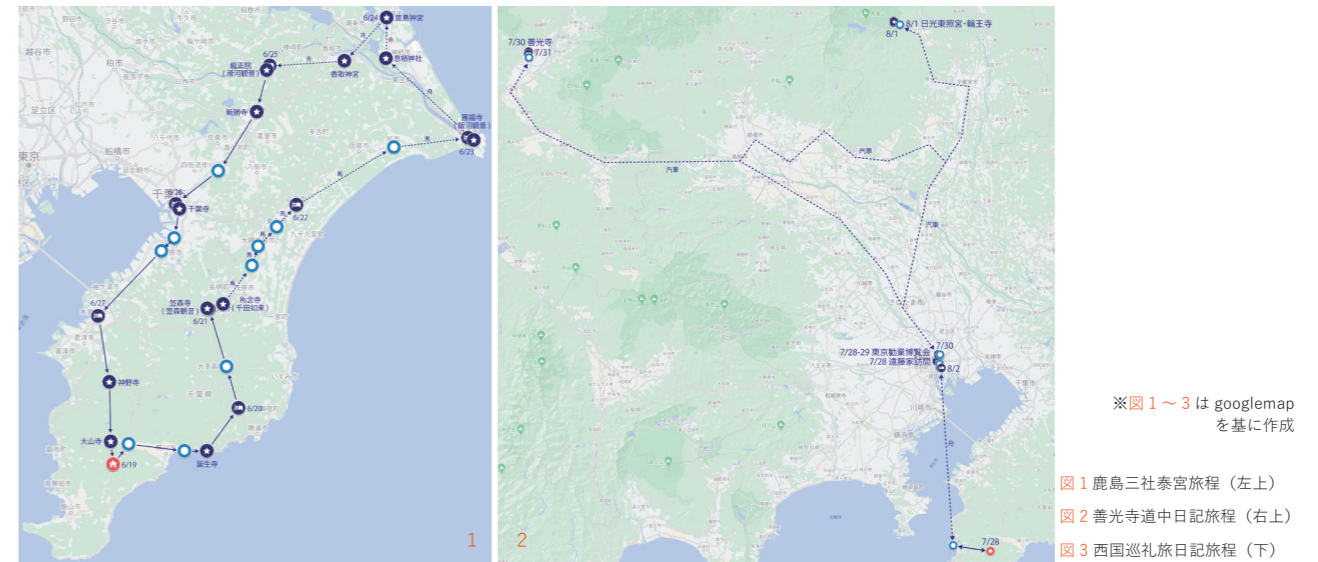
を行って、それぞれの旅の行程や観光対象を捉えると共に江戸と明治の旅の変化を概観した。

『鹿島三社参宮』(図1)

筆者：堀本清二(保里家9代当主/27歳時の旅)
 期間と日数：1829年6月19日-28日(10日間)(現在の暦で1829年7月19日-28日)
 旅の目的：鹿島神宮、香取神宮、息栖神社の参詣
 道中の主な訪問先：誕生寺、笠森寺、新勝寺、千葉寺、神野寺など(計12か所)
 行程の概略：外房を北上し利根川を舟で渡り、鹿島神宮参詣の後に折り返して内房を通って大井村に戻る房総半島を1周する旅
 同行者数：15名(長狭にて集合し、内5名は成田で日光に向かい、10名が最後まで同行)

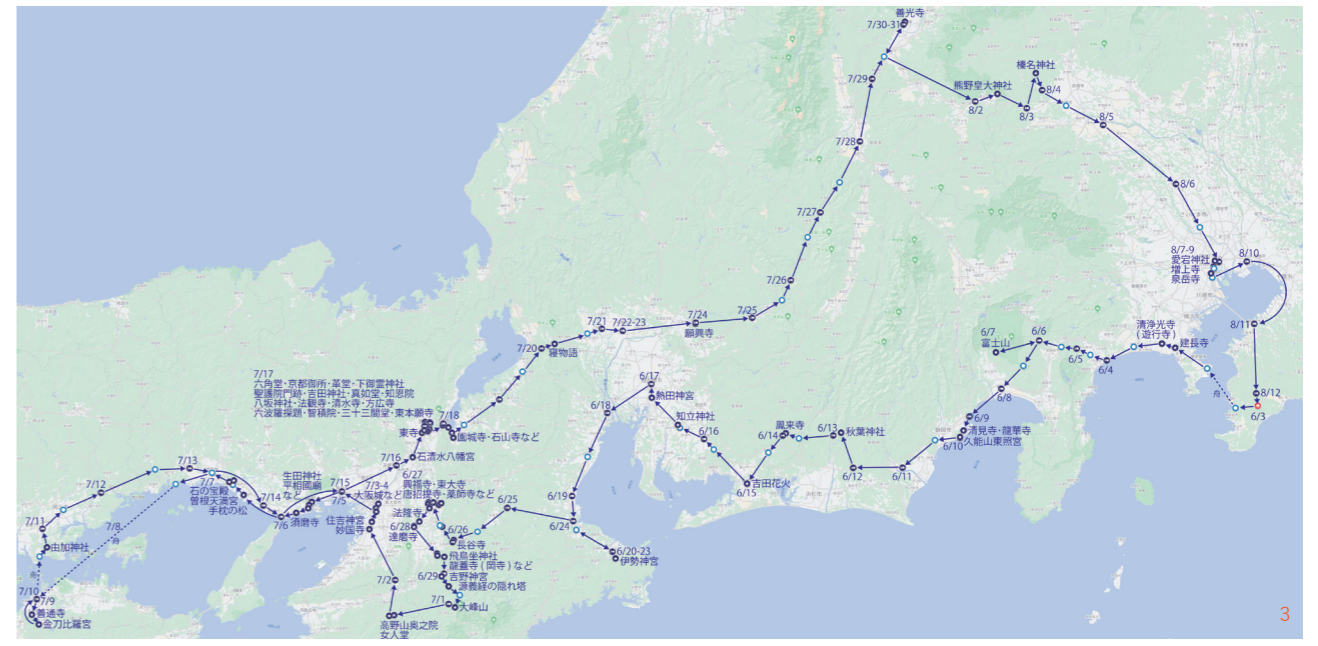
『西国巡礼旅日記』(図2)

筆者：保里昭平(保里家10代当主/23歳時の旅)
 期間と日数：1863年6月3日-8月12日(69日間)(現在の暦で1863年7月18日-9月23日)
 旅の目的：富士山、伊勢神宮、金毘羅宮、善光寺の参詣、西国巡礼(奈良、京都、大阪)
 道中の主な訪問先：久能山東照宮、熱田神宮、石清水八幡宮、増上寺など名所旧跡(計79か所)
 行程の概略：往路は舟で浦賀に渡り、東海道、山陽道を通り、舟で瀬戸内海を渡って金毘羅宮を参詣。復路は瀬戸内海を舟で渡って山陽道に次いで中山道、北国西街道を通って善光寺へ赴き、北国街道を介して中山道に再び合流し、江戸から(強風のため舟で渡れなかったため)房総往還を通して大井村に戻る広域に及ぶ西国巡礼の旅
 同行者数：男性のみ57名(大井村をはじめ近村の住民)



※図1~3はgooglemapを基に作成

- 図1 鹿島三社参宮旅程(左上)
- 図2 善光寺道中日記旅程(右上)
- 図3 西国巡礼旅日記旅程(下)



域学協働の工夫!

- ★古文書・古地図を保有する地域との協力関係の構築
- ★集落の歴史をひも解き、その学術的評価を行った

『善光寺道中日記』(図3)

筆者：保里昭平(保里家10代当主/67歳時の旅)
 期間と日数：1907年7月28日-8月2日(6日間)
 旅の目的：善光寺参詣
 道中の主な訪問先：遠藤家訪問、東京勧業博覧会、日光東照宮、輪王寺(計5か所)
 行程の概略：舟で勝山から壺岸島へ渡って東京に入り、路面電車の上野に行き宿泊。東京勧業博覧会では日中だけでなく夜景も見物している。汽車で上野を越し、長野、日光を巡って戻り、往路と同じく舟で勝山に渡り、大井に戻るという汽車を使用した短期間・長距離移動による旅。
 同行者数：4名(保里昭平を除く3名は女性で、昭平を含む3名は高齢者)

3. 成果と課題

江戸・明治の旅は共に有名社寺の参詣を主目的としていた。現代の旅行でも社寺仏閣を訪ねることは多く、大井区(房総半島)か

らは陸路ではなく舟で海を渡ることも、今日に東京湾アクアラインを通行するのと道程が近く、時代を経ても似ている考え方がうかがえたことは興味深いものであった。

特に明治の旅は、女性も含む高齢者によるものであったが、汽車による長距離移動を行えることで心身への負担が少なく安全なものとなっており、江戸の旅では道中の荷物を増やさないように旅の最後に土産物を購入したが、明治の旅では早いうちから購入しており、旅のスタイルにも変化が認められた。

東京勧業博覧会、特に夜景見物に象徴されるように、寺社参詣のみでない観光対象の広がりを見せたと共に、3つの旅はいずれも夏季であったが、明治では各所で度重ねて氷水をよく飲んでおり、江戸から明治への変化、つまり近代化の恩恵を随所で読み取ることが出来た。

2022年度は旅日記の翻刻が取り組みの中心となり、これら3つの旅日記の対比に留まったが。特に地域への還元及べていないため、研究成果の一般公開への取り組みも課題である。